令和８年３月１８日

北代縄文通信

第５４号

― 令和7年度北代縄文広場の主な活動 ―

北代縄文広場ボランティアの会の研修会を実施（6/29・12/11）

研修会の様子

北代縄文ボランティアの会は、平成 11 年に北代縄文広場の開場にあわせて設立され、来場者の見学や体験学習のお手伝い、広場内の維持管理の補助などの活動を行っています。

会では毎年、解説活動や体験学習指導に生かすための研修会を行っており、本年度は 2 回実施しました。

1 回目は令和 7 年 6 月 29 日、縄文時代に関連する映像を 2 本視聴しました。1 本目はさまざまな文様やダイナミックなデザインを施した縄文土器の魅力や、世界でも人気の土偶などをテーマにしたもの、2 本目は日本人のルーツに関する新たな知見について紹介したものを視聴し、解説活動に生かすための知識を深めました。

2 回目は令和 7 年 12 月 11 日、北代縄文広場ボランティアの会会員の森喜美氏が「縄文人の道具箱」と題して報告をされ、そのテーマに基づいて意見交換を行いました。特に、祈りや呪いなどの祭祀に使用したとみられ「第二の道具」とも称される、土偶や石棒・石冠、三角壔形土製品について認識を深めました。また、会員の日頃の展示解説の方法についても、日々の縄文時代に関する学習成果を生かし、来場者へ分かりやすい解説を行うなど、一層の工夫が必要だとの意見が交わされました。

ミニ企画展「北代遺跡の発掘調査成果 ―平成 12 年度の発掘調査から―」を開催（7/23～1/25）

展示状態（一部）

本展では、北代遺跡の平成 12 年度の発掘調査で見つかった、縄文時代晩期中葉～後葉（約 2,800～2,400 年前）の粘土採掘坑（粘土を採取した穴）から出土した縄文土器、石器、土製品など 38 点を展示しました。

縄文土器には、新潟県や東北地方で認められるものが含まれており、これらの地域と北代遺跡との関わりがうかがわれます。また、赤彩土器や土偶も含まれており、粘土採掘坑で何らかの祭祀が行われていた可能性があります。

北代縄文考古楽講座を2回開催(8/30・10/25)

本年度は「縄文時代後期・晩期の北代遺跡―平成 12 年度以降の調査から―」、「縄文人の石器作り」と、2 回の講座を行いました。

講座その 1 は令和 7 年 8 月 30 日に開催し、埋蔵文化財センターの納屋内学芸員が「縄文時代後期・晩期の北代遺跡―平成 12 年度以降の調査から―」と題して、平成 12 年度以降に行った北代遺跡の発掘調査成果から、縄文時代晩期の本遺跡の様相や他地域との交流について解説しました。

講座その１　講師の納屋内学芸員

講座その 2 は令和 7 年 10 月 25 日に開催し、山本正敏氏(富山考古学会会長)を講師にお迎えし、磨製石斧と打製石斧からみた縄文人の石器作りについてご講演いただきました。

講演では、朝日町境Ａ遺跡の発掘調査成果を事例に、それぞれの石斧の使用方法・製作工程を説明されるとともに、境Ａ遺跡で作られた磨製石斧が東北地方や近畿地方まで広く分布している状況から、他地域との交流の可能性についてもわかりやすく解説していただきました。

講座その２　講師の山本正敏氏

ミニ企画展「富山市八尾地域の縄文時代 ～滅鬼遺跡・蔵王神社遺跡～」を開催中(1/27～)

本展では、富山市八尾地域に所在する滅鬼遺跡（平成 26・27、令和 3 年度調査）と蔵王神社遺跡（平成 26 年度調査）の試掘調査・工事立会で出土した縄文時代中期（約 5,000～4,000 年前）の縄文土器、石器、石製品 34 点を展示しています。

両遺跡周辺では、縄文時代前期から後期にかけて、人々の生活の場所が段丘の高い部分から低い部分へと移っていくと推定されています。

展示状態

今回展示している、段丘の低い部分に位置する滅鬼遺跡と蔵王神社遺跡では、縄文時代中期中葉を主体とする遺構・遺物が初めて確認されたことから、上記した遺跡の立地の変遷を考えるヒントを得ることができました。

鯉のぼりの掲揚、「14歳の挑戦」受け入れ、縄文冬まつり開催など

令和 7 年 4 月 25 日～5 月 6 日には、子供たちの健康を願って鯉のぼりの掲揚が地元長岡地区により行われました。令和 7 年 7 月 9 日には「社会に学ぶ『１４歳の挑戦』」で速星中学校の生徒 3 人を受け入れ、復元建物の手入れや縄文土器づくり用粘土準備などの職場体験活動を行いました。

令和 8 年 1 月 17 日には、長岡地区による縄文冬まつりが開催されました。